

生き生き

NO. 86 平成26年11月号 岡崎市現職研修生活科広報部発行

魅力ある授業実践を求めて

生活科部長 田中 俊二

じっと見つめる真剣なまなざし。身を乗り出して覗き込む表情。何度も確かめに行くその姿。一生懸命に自分の思いを伝えようとする目の輝き。納得できたときの満面の笑顔……。子どもが対象にじっくりかかわって、思いが高まっているときの子どもの姿は、とても魅力的である。それは、子どもが学ぶ喜びを感じて内面が高まっているからであり、夢中になって自分らしさを表出しているからである。そういう中にこそ、子どもの内面の成長がある。

そんな子どもの姿は、魅力ある授業実践において実現する。生活科は、自然と人とのかかわり、気づきや思いの高まり、様々な表現活動、具体的な活動や体験を通して学ぶといった、いろいろな学びのもとになる大切な要素がある。だからこそ、魅力ある授業実践を通して、子どもの輝く学びの姿を引き出したいものである。魅力ある授業実践のポイントはいくつもある。



まずは、生活科の目指すねらいにあったものでなければならないことが前提である。そのうえで、教材そのものに魅力がある、そんな教材を発掘すること、そして、その教材を子どもにどう出会わせ、どう子どもの思いや追究を支え、どう子どもの思考を深めさせるのかを見通して、手立てを講じていくことが必要である。子どもの生活に根ざしたものや、繰り返しかかわれるものは、魅力ある教材になり得る一つの要素といえる。教材の出会い方も、教材の内容によって、驚きや興味・感心、疑問などインパクトをもって与えられるものもあれば、じわじわ意識を掘り起こしていく必要があるものもあるであろう。

実践を進めるにあたっては、一人一人の気づきを大切にし、その子の思いや感性が表れるその子なりの言葉や表現、こだわりなどをしっかり見取っていくことが大切である。そして、対話や朱書き、活動や表現の場の工夫、かかわり合い、振り返りの場などを通して、子どもの学びを支えていくことが大切である。

今年度も、そんな魅力ある授業を目指して、地道に取り組んだ実践が授業力・教師力アップセミナーや教研集会などで報告された。これまでの歩みをふまえ、さらに積み上げていく価値は大きい。今後も、魅力ある授業実践を目指して、地道に取り組んでいきたいものである。